オーストラリア国立公文書館（NAA）オンラインヒアリング報告

日時：2022年12月20日（火）日本時間 14:00～15:00

ヒアリング対象者：

オーストラリア国立公文書館（NAA）：

公衆関与とアクセス部門ディレクター（Access and Public Engagement Director）　Ms. Webber 様

コレクション運営ディレクター （Collection Operations Director）　Mr. Swain 様

ヒアリング概要：

①　常設展示のテーマ「Voices」 と「Connections」展示内容について

常設展示「 Voices / Dhuniai　」（展示面積：220㎡）

- 国の成り立ちや憲法制定のプロセスなどにまつわる収蔵資料（オーストラリア憲法や文書、それらに関連する資料）を展示し、憲法が保障する自由や権利について、その歴史をたどる。
- 中央のショーケースはオーストラリア憲法などの実物資料を所蔵（写真次頁）。通常、資料保存のため閉めていることが多いが、特別な期間や学校団体等訪問時だけ開けて見学者の目に触れるようにしている。
- アボリジニなど先住民が憲法において認められる過程を壁面のグラフィック等で展示している。

常設展示「 Connections　/ Mura gadi 」（展示面積：380㎡）

- 壁面に大きなデジタルウォールを設置。収蔵資料をさまざまな方法で解釈して、より多くのストーリーテリングの機会を提供できるようにした。デジタル展示は、モノ展示だけでは実現できなかったことが可能となった。例えば、家族で見学するときに異なるコレクションを選んで探索することができるなど、各々の発見について会話が生まれる機会となっている。

常設展示「Voices / Dhuniai」

常設展示「Connections / Mura gadi」

Designed and Fabricated by Thylacine Design for the National Archives of Australia
Photography by Ben Guthrie
https://www.thylacine.com.au/who-what/national-archives-of-australia/?portfolioCats=32%2C26%2C15%2C16%2C17%2C29%2C4

② 企画展示について （展示面積：220㎡）

- 収蔵資料を活用した企画展示を実施。オーストラリアの20世紀における社会や文化の歴史に焦点を当てる。内容は写真中心のビジュアル展示や、社会の複雑なテーマをかかげた展示など様々である。
- 最近の企画展では、収蔵資料の中から1960年代から80年代にかけてのモーテルの写真を抽出し、人々がモーテルを用いてどのようにオーストラリアを旅したのかを取り上げた。シンプルな企画展だったが、ノスタルジックなこともあって非常に人気が出た。

③ 公文書館における展示の位置づけ

- 国立公文書館の収蔵資料は、国民の生活と国家とのかかわりの記録として保存管理、公開される。これらの記録は、国民と連邦政府の強いつながりを示し、自分たちの国と先人の歴史を知る大切な手がかりとなる。
- 常設展示、企画展示、巡回展示プログラムと生涯学習や学校プログラムは、国民へ国立公文書館の収蔵資料へのアクセスを提供し、オーストラリアの民主主義にとっての国立公文書館の役割やその重要性についての認識を高める役割を担う。

イギリス国立公文書館 （ＴＮＡ）オンラインヒアリング報告

日時：2023年1月18日（水）日本時間20:30～21:30

ヒアリング対象者：

Head of Events and Exhibitions　展示と教育プログラム担当　Mr. Burgess 様

ヒアリング概要：

①　ＴＮＡの展示の今後の展望について

- 現状の展示室は約300㎡と50㎡の２つのみだが、将来的に、アーカイブに馴染みのない多様な人々を迎え入れるための新しい展示室を計画している（次頁写真）。コレクション全体を素早く一望し、自分が探しているものを明確化できる空間やデジタルの展示を用意したい。それにより自分が何に興味があるかを見つけ出し、一人ひとりが資料と自分とのつながりを直観的に感じられるようにしたい。
- 例えば、手前の展示台の巨大な本には視線をとらえるセンサーがあり、関連する文書や地図、案内人が飛び出すデジタルの仕掛けを仕込むことや、デジタルウォールやタッチパネルなど取り入れることを考えている。
- イベントスペースも設け、上映会や他館から借りた資料の企画展示も想定する。
- デジタルな展示だけではなく、例えば、舞台装置のような大掛かりにセットされた環境演出など、人がそこに入って、座ったり回ってみたりする身体性を伴う体験も重視している。過去に、ナイトクラブを作って1920年代の世界観を表現したり、冷戦期のシェルターを制作した。展示する文書や記録が生まれた時代を再現して、人々の興味を引きこみ、文書展示とインタラクションさせる。これは、とても成功した。資料とエモーショナルにつながり、リアリティが生まれる。展示では、そのような瞬間を提供できると考えている。

② ＴＮＡの展示の役割について

- 研究者向けにはTNAはとても有名だが、一般の人の利用は多くない。今、研究者以外の利用者層をひろげる努力をしている。
- 展示は利用者にTNAの魅力を伝える「エンジン」のような役割を持つ。ミュージアムは、文書の他に造形物や立体を通してストーリーを物語る。文書等アーカイブ展示の難しさは、平面的で紙ベースになること。従って、文書と立体をミックスした展示を心がけている。文書等アーカイブは、細かなストーリーをミュージアムとも異なる感じで伝えられる。それを定着させたい。
- アーカイブや記録は、発信した「誰か」の何らかの「声」を持つ。我々が共通して行うのは記録からさまざまな「声」を取り出すこと。映像や音声も用いる。「誰がストーリーを語っているか」を大事にして、来館者には、自分と関連付けて関わりを見出すこと促している。

③ 展示部門の体制について

- 展示部門は10名。内訳は、インタープリテーション（展示開発や教育）に6名、イベント担当に4名（現在1名募集中）。展示によってプロジェクトチームを編成し、コアは展示開発に2人（リサーチなど）、キュレーターや記録、資料の専門知識を有する者が１～4人で構成。外部デザイナーに展示制作を委託することもある。加えて、補修や保存、清掃、安全管理、アテンダント、マーケティングや広報の担当が加わり、さらに大きなチームができる。ひとつのプロジェクトは最低12人は必要。
- 展示の制作にあたって、外部の歴史家や地域の人に意見を求めることもある。今進めている「発明」の企画展は、地域の学校団体を巻き込んでいる。関心の高い外部に協働を求めることで、館スタッフの見識を拡げることにつながっている。

アメリカ国立公文書記録管理局（NARA）オンラインヒアリング報告

日時：2023年1月25日（水）日本時間7:00～8:00

ヒアリング対象者：

External Affairs Liaison　渉外担当（国際アーカイブ協会副会長）　Ms. Phillips 様

Director of Exhibition　展示担当　Mr. Ruskin 様

Director of Education Program　教育プログラム担当　Dr. Coddington様

ヒアリング概要：

①　NARA Museum Exhibition（NARA博物館）のメイン展示と、展示の役割について

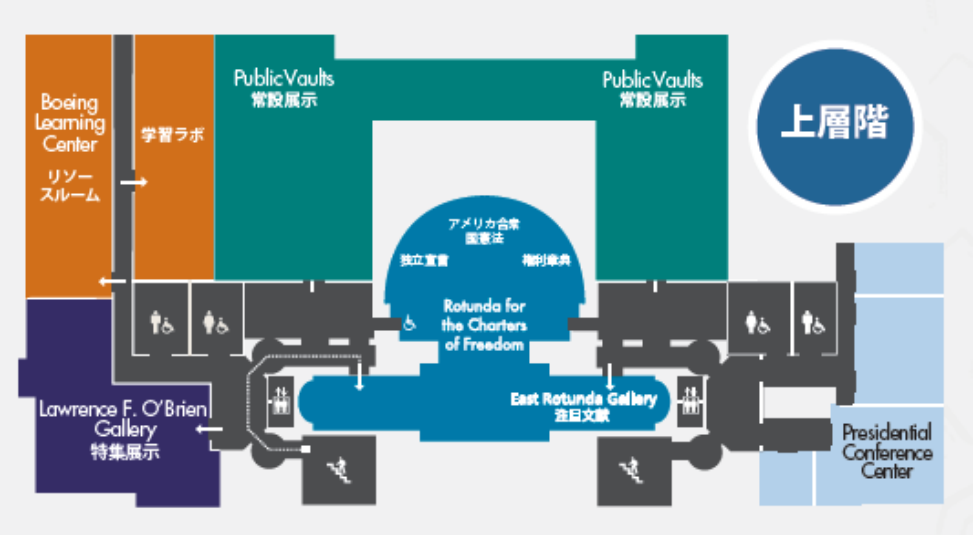
- ロタンダ（建国関連の文書がある円型ホール）がメインの展示（展示面積：約279㎡）。アメリカの建国に関する資料の原本を展示している。次にルビンスタイン・ギャラリー（権利に関する記録）（展示面積：約279㎡）で、来館者が建物に入って最初に見る展示物になる。女性や黒人など米国のさまざまな権利が発展してきた物語を語る。３つ目はローレンスオブライエンギャラリー（企画展示室）（展示面積：約279㎡）で、約18ヶ月毎に展示内容を変えており、歴史的もしくは時流に則った新しい様々な話題を、毎回異なる視点で展開する。
- Public Vaults（市民の金庫）は、今年閉鎖する予定だが、公文書館とは何かを説明し、非常に体験的な展示だった。代わって新設される展示エリアも体験型で、よりアップデートしたバージョンになる（展示面積：約836㎡）。
- 他の博物館との最大の違いは、米国市民や非米国市民に対して、政府や市民権に関するプロセスに積極的に関与するよう促すことに挑戦している点。良い面も悪い面も含めて国の歴史を伝えるだけでなく、どうしたらより良い国にするために行動できるか、来館者に問いかけ続けることにある。（博物館と違って）文書を展示するが、教育チームは文書の解釈を伝えるのではなく、展示チームと協力して、訪れる人々を触発しながら同時に難しいトピックについても目を向けさせることをポイントとしている。
- 公文書館は、省庁の一つとして連邦政府の歴史の本質的なエビデンスを公開するために存在し、これが公文書館の目的。そのエビデンスに市民（国民）がアクセスできることは、民主主義の礎である。

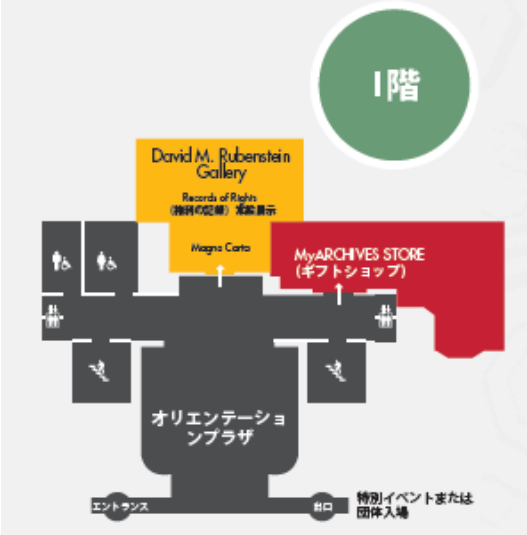
ロタンダ（円型ホール）
https://museum.archives.gov/founding-documents#declaration

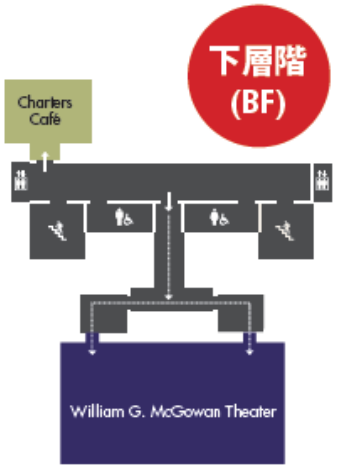
Public Vaults（市民の金庫）
https://museum.archives.gov/records-rights

インタラクティブな展示
https://museum.archives.gov/public-vaults

エリア構成（館の公式マップより）







② 文書の原本展示とデジタルを用いた展示について

- 原本にはそれ自体に価値と力があり、それだけで来館の動機になる。一方、劣化を防ぐために展示期間が限られるので複製を使うこともある。人は、オリジナルとデジタルでは異なる反応をみせ、オリジナルの方に高い教育効果があるという研究もあった。
- そもそも原本があることがポイントで、デジタル化によって理解や深堀がより進むことの手助けになる。まず原本があり、（すべての原本を見せられないので）デジタルがそれをフォローできるとよい。

③ 文書以外の展示物について

- 連邦政府の裁判の証拠品や軍のメダルなど、連邦政府の記録物は、可能な限り様々に見せている。博物館の展示の観点から、文字情報だけだと物語を伝えるのが難しい。グラフィックや展示物などの立体物、体験的な要素を交えて、展示物に目を向ける仕掛けを施す。展示する文書に関連する重要な資料、立体物を、他館から借用することもある。

④企画展について

- 企画内容にもよるが、実施までの期間は少なくとも３年は確保する。建物との契約手続きに半年、各種リサーチおよび展示手法やデジタル展開などを検討し、色々な手続きを総合すると１つの企画展示に５年計画で進めようとしている。
- 企画展は連邦政府の財源は使っていない。ナショナルアーカイブ財団の資金でまかなっており、準備期間に資金調達も行う。

⑤ 教育プログラムやスタッフの体制について

- 展示担当と教育担当が連携することが大切。展示担当はどのようなストーリーを伝えるか、教育担当はどんな人に向けてどんな教育的効果を狙うかを考え、企画や制作の早い段階から関わり協力し合って進めている。スタッフの専門は、歴史や文書の専門家ばかりではなく、例えば美術や建築など多様なバックグラウンドを持つ人が入って、異なる視点を取り入れることがよい。
- 教育プログラムは、学生に、「問いを投げかける（inquiry-based）」方法で、学生には証拠（文書）を見て、自分の答えを自分で見つけ出してもらう。我々は答えを提供しない。文書が何を意味するのかを、考えるために来館してもらっている。
- 現在改築に当たって新しい学習センターもつくっている。学習センターは展示と同じくらい重要。連邦政府が国民の日常生活にどう関わっているのかを示す場となる。